



近江の神社建築

はじめに

近江の国・滋賀県が京都府、奈良県と同じく、古建築の面でも大切な遺構を持っていることは改めて言うまでもありません。ここではその中の神社建築を扱いますが、神社建築というと、本殿だけを取り上げて論じたものが多かったようですが、これは鳥居・楼門・回廊・附属舎なども含めて考えないといけないと思います。県内にはいま他府県に見られない日吉造の本殿もありますが、一方楼門などにも最も古くて美しい姿のものから、それほど古くなくても上下左右の均斉のとれたすぐれた楼門も各地の神社に見られます。それで神社建築全体として上記のような各種の建築を扱いたいのですが、紙面の都合でこの号

では本殿だけに限ることにします。

寺院の本堂に当る社殿を本殿といいますが、県内の本殿には各種の様式が見られ、大へん変化に富んでいます。最古の平入形式である神明造(例、甲良神社)から最も一般的な流造(例、苗村神社)、次に分布の広い春日造(例、地主神社)、ほかでは見られない日吉造(例、日吉大社)、寺院の本堂ではないかと思われる入母屋造(例、御上神社)、それに近世以後徳川氏関係(東照宮)に最も多く見られる複合社殿形式のいわゆる権現造(例、日吉大社末社の東照宮)など、本殿形式の上からも、特殊なものを除いて普通の本殿はみな県内で見られます。ことに本県の特色として誇れることは、中世に造られた社殿が非常に多く残っている

ことで、これは中世の石像遺宝と共に他府県の及ばないところです。

平入で最古の神明造

現在県内で国宝に指定されている本殿は7棟ありますが、このことからだけでもその優秀性がわかります。ここでは、この数多く残された神社本殿について、それぞれの造り(型)や時代背景などを考えながら見て行くこととしましょう。一般に最古の本殿形式としては妻入の大社造、平入として神宮(伊勢)の神明造があげられますが、甲良町尼子の甲良神社本殿は三間社の神明造(権殿は流造・江戸時代)の好例です。全部直線から成る屋根、側面屋根端の破風が屋上に出て千木となり、破風の上部に4本ずつの鞭掛という箸のような



甲良神社本殿と摂社(神明造)

木が出ていることなど、伊勢の神宮の造りと同じで古い型がよく伝えられたもので、壁面も土壁でなくすべて板壁であるのも古式です。このように、奈良時代末ごろまでの神社建築は直線構成だったようで、それがずっと後世までこの神社に残されているのです。

仏教の影響を受けた春日造

ところが平安時代初期に密教が伝えられ、神仏混合説が唱えられるようになりますと、神社建築も、大陸の進んだ中国系建築様式を取り入れるようになりました。たとえば、それまで鳥居・玉垣だったのが楼門・回廊になったり、素木であった木部を朱や緑に彩色したり、屋根に反り(凹曲線)をつけたりなどするようになりました。そうしてできたのが妻入では春日造、平入では流造です。県内には、中世にできたこの春日造と流造の本殿が大へんたくさん残っています。

春日造の代表としては、その名の由来する奈良の春日大社本殿、流造の代表はふつう京

都・加茂社(上・下)の本殿が挙げられますが、これらは古式をよく伝えながらも、たびたびの造り替えで建築そのものは江戸末期、文政初年のものになっています。しかし本県では、建築そのものが古いまま多数残っているのです。

春日造というのは、切妻(本を斜に開いて八の字形に伏せた形の屋根)の前(妻)だけに廂のような簡単な屋根の付いた本殿形式ですが、この廂の部分には階段があるのが一般的で、この部分を向拝といいますが、春日造はこの簡単な形から次第に発達して複雑化し、のちには廂の左右に斜に出る隅木の入ったものも出て来ます。大津市葛川坊村町の地主神社本殿は最も発達した傑作で、室町時代・文亀2年(1502)の建築です。この社殿は三間社(正面の柱間が三つある社殿)で、春日造では大型のものです。正面向拝上や身舎のまわりには牡丹に獅子・牡丹・桐・唐草などの蓑股があり、輪郭も内部彫刻も室町様式の特徴を

よくあらわしている傑作です。ことに正面の隅木から向拝に移るところの軒は、垂木(軒下に平行に並んだ多くの木)が複雑なむずかしい曲線をなしていて、この作者のすぐれていたことを示しています。平凡な大工ではこのような計算も工作もとてもできるものではありません。

なお、本殿の前の一間四方の幣殿も同時の作で、S型曲線(照り起り)の唐破風の屋根は美しく、蓑股には桐・鳳凰・獅子が古調をもって見事に彫られています。惜しいことに拝殿は新しいものです。

最も一般的な流造

流造は、神社本殿の最も一般的なもので、全国的に分布



地主神社本殿(春日造、隅木入り)

している形式です。春日造と違って平入（切妻の屋根面の見える方を正面出入口とする型）で、横から見ると前面の屋根が背面の屋根よりも長く延びているのが特色で、正面は向拝となっています。春日造と同様に屋根面が凹曲線をなしているのは中国系建築——仏教



園城寺・新羅善神堂（流造） —滋賀県教育委員会提供—

寺院の影響によるものです。県内には、国宝の流造本殿は二つですが、重要文化財に指定されているものは多数あります。

国宝の流造本殿は、園城寺(三井寺)境内の新羅善神堂(南北朝、1347頃)と蒲生郡竜王町の苗村神社西本殿(徳治三年、1308)です。い

ずれも三間社流造の代表作で、造立年代も近く、本県における地方色をよく出た名建築です。この両本殿は、ともに奥の三間二間が神座のある内陣、前の三間一間は廂で、この廂部分は明るい室とされていますが、これも本県地方の特色をよく出しているものと言えま



苗村神社西本殿（流造）

—滋賀県教育委員会提供—

す。この廂のまわりは格子戸か時には花狭間格子戸（後出・大笹原神社）にしてあるために明るくなっているのです。流造の社殿は、正面からでなく横か斜め前方くらいから見た方が特徴もよくわかり、姿も美しく見えます。三間社の社殿が小規模になると一間社に



日吉大社東本宮本殿背面（日吉造）

なるのですが、これは正面の柱間が一つのを言うので、県内には中世の間社流造のいいのがたくさん残っています。

本県独特の日吉造

次に、現在本県にしか見られない本殿が日吉造で、大津市坂本本町の日吉大社にあります。ここの西本宮、東本宮、宇佐宮の各本殿がそれです。これは中心部(身舎)が三間二間で、そのまわり三方(後ろを除き)に廂が付いた平面のものです。身舎の屋根のところへ付いた廂は後方へ回りませんから、正面からはふつうの入母屋の形に見えますが、横から見ると後ろの方の屋根を垂直に載り落したようであり、背面に回ると両横の廂の切口ともいふべきところと身舎とが一平面をなしています。このような形の上に屋根を架けたので、背面はちょうど春日造の社殿二つを背中合わせにしたような姿です。これが日吉造の一番の特色ですから、横と後ろへ回って味わわれることをお勧めします。この型はおそらく平

安初期ぐらいにでき、それには当時の貴族住宅の造り方も関係したであろうと思われます。神社本殿というのも、結局は神の一時的または永久的な住居であるわけですから。この日吉造は他社にもあったようですが、いま本格的なものには日吉大社に見られるだけになりました。

仏堂とよく似た入母屋造

神社建築は、ごく古く成立したものがずっと伝えられて来たのですが、一方当時の社会、とくに仏教などの動きに応じて変化したり、新しい型ができたりしました。それで、神仏混合の思想が発展して以来、神社本殿にも寺の本堂と一見変わらないようなものが現

われて来ました。入母屋造の本殿がそれで、ここでは、その最古と見られる野洲町三上の御上神社本殿(鎌倉初期?)と、同町大篠原の大笹原神社本殿(室町)とのともに国宝の社殿をとりあげました。

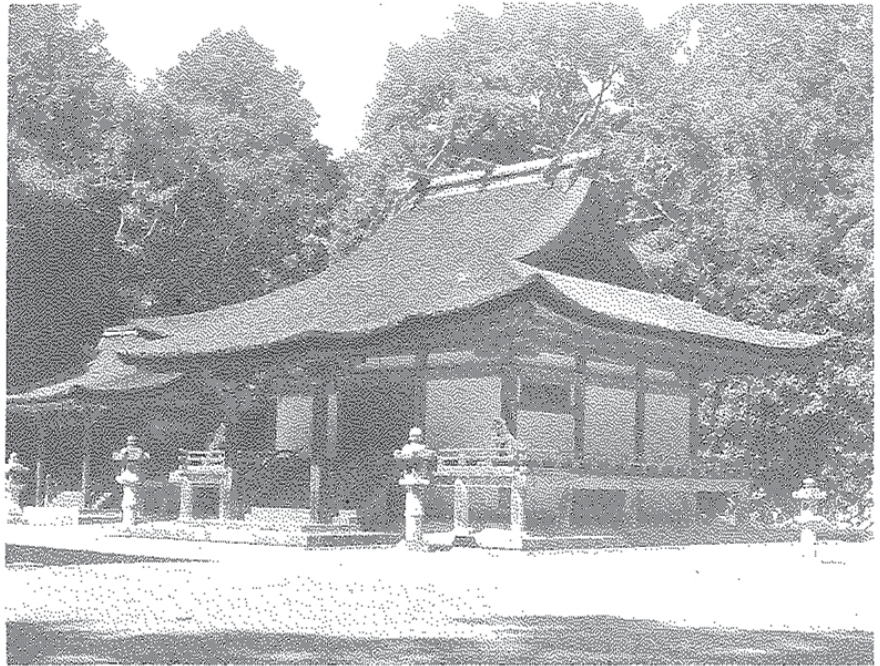
御上神社本殿は三間に三間、一重、入母屋造という構造形式で、県内では石山寺本堂とともに現存のものでは最古の建築です。床が高く、屋根に千木と勝男木が上がっているのは神社らしく見えますが、千木や勝男木がなく床が低かったらどこかの寺院の本堂と見えるかも知れません。建築年代ははっきりしませんが、鎌倉のごく初期か、平安末まで溯れるものと見られます。ごく簡素な造りで、縁の下の礎石に蓮弁を彫ってあるのも仏教的で、その一つに建武四年(1337)の銘があって、この頃に縁回りが改造されたとも見られます。全景を正面七三くらいの辺から味わって下さい。

入母屋造のもう一つのいい本殿が大笹原神

社のそれです。これは室町初期、1414年の建築です。この場合、御上神社よりさらに仏寺的で、千木や勝男木もありません。正面三間一間が廂で、織細な花狭間格子戸を入れていますから内部は大へん明るくなっています。この本殿は、比較的建ちが高いので神社かと思われませんが、ここでは細部の意匠が特にすぐれています。それは、軒まわりの臺股やその上の肘木、それに縁の行き詰まりにある衝立のような脇障子の板面に飾った広葉樹らしい装飾彫刻などです。

臺股は、平安後期ごろから、それまでの板のブロックのような板臺股とはちがって、内部を彫り透かした透臺股あるいは本臺股と呼ぶものが考え出され、その内部彫刻は時代とともに次第に発達変化して現在に至っています。そしてその初期からの変化発達の程度によって、造られた時期が大体判定できます。一般的に言って中世——鎌倉・室町ごろのものは彫刻の盛り上がりは少ないが美しい線で唐草や牡丹、それに獅子などの動物を彫っています。日光の有名な「眠り猫」も結局これの発展した姿に過ぎないのです。

そこで大笹原神社の臺股を見ましょう。輪郭全体も室町時代をよく表していますが、内部彫刻も大切です。身舎の正面中央のものは火焰付きの宝珠を山形に積んだ(杉なりに積むと言います)もの、その他は



御上神社本殿（入母屋造）

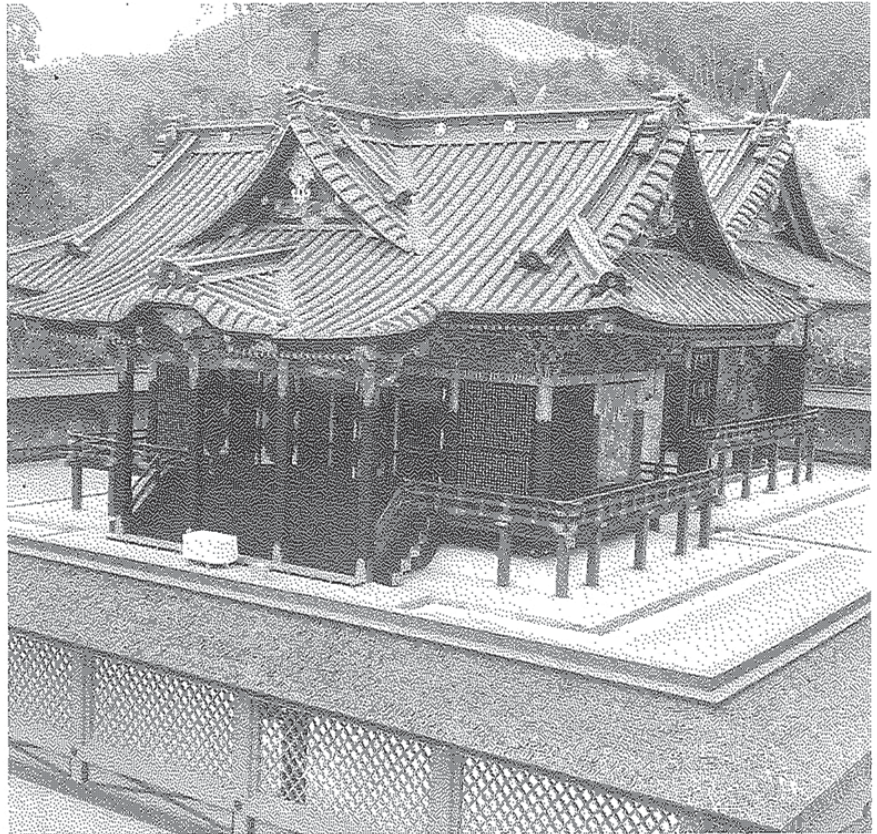


大笹原神社本殿（入母屋造）

中心に牡丹か桐などを置き、左右から唐草が降りて来て牡丹か桐を支えているデザインです。このようにほとんど左右同形で彫りの浅いのが、鎌倉・室町ごろの臺股彫刻の通有形

です。ところで、この社の牡丹・桐などと同じようなものが前出の地主神社本殿にもあって、ともに室町時代のものであることを思わせます。

そのほかこの本殿では、脇障子の板面に付けた樹木（広葉樹？）と思われる彫刻、あるいは前方花狭間格子戸上の欄間（鴨居の上にある横に長い空間）に入れた雲に三鈷の彫刻など、各部分にわたって意匠がよく働き、且つそれらが優秀な作であるのが見られます。側面下部にある格狭間という一種の輪郭内の美しい唐草も見落とさぬようにしたいものです。



日吉大社末社東照宮社殿（通称・権現造）

複合社殿形式の権現造

以上、各種の本殿形式について述べて来ましたが、これらはいずれも本殿だけが独立していて、前の幣殿・拝殿などと建築的に連なったものではありませんでした。ところが近世以後になると、拝殿と本殿、またそれらの間にできた中間の部分を一連の建築とした、平面（間取り）の複雑な社殿形式が造られるようになりました。その初源的なものは既に平安時代に京都の北野天満宮に造られたと言われていますが、近世以後、豊臣秀吉の豊国廟において完全に壮麗なものが現われ、のち徳川関係の霊廟として各地に造られました。この複合社殿形式を俗に権現造（ミナトノミヤノミヤ）と言います。この名は「東照大権現」から取ったもので、古い呼び名ではなさそうです。

本県は権現造にも恵まれ、坂本の日吉大社のほか彦根の天満宮、井伊家の廟、それに寺ではありますが彦根の長寿院などがこの形式を採っています。それらの中で最も華麗なのが日吉大社末社の東照宮です。日光廟とほとんど同時の江戸時代初期、1634年の造営です。

先年修理ができ、昔の姿に復元され、目もあやな色彩に輝いています。構造形式は、拝殿が五間に二間、本殿が三間に三間、その間が右の間に三間に一間、全体が工字形の平面になっています。内外ともに全体にわたって彫刻・工芸（金工、漆工など）・絵面・彩色などで美しく装飾され、眩（くら）いばかりです。この形式は、元来拝殿と本殿が前後に建ち、その間の土間であった所に屋根をかけたもので、石敷の土間というところから「石の間」の名が生まれました。今は床張りのものも多いのですが、拝殿から階段を降り、また本殿の階段へ昇るようになった造りに昔の名残りをとどめています。

おわりに

以上、本殿だけに終始しましたが、神社建築は、はじめに述べたように本殿を中心に拝殿・楼門・塀などが集って完全なものとなるのですから、神社参拝の時には、これらの建築群を総合的に拝見されることを希望します。

（摂南大学教授 近藤 豊氏提供）